

日本語の非母語話者を研究対象にした新しい社会言語学の可能性

ダニエル・ロング

一 問題の所在

本稿では、「非母語話者」を対象にするという社会言語学の新しい視点を模索する。これまでの社会言語学では、「母語話者」が対象の中心であった。伝統的な方言では地元出身者のみを被調査者にした。日本でこれは「生え抜き」という表現を使ってきており、アメリカでは、*NORM*、つまり *non-mobile, old, rural, male* (非移住者、老年、田舎生活者、男性) という頭文字語が使われてきた。こうした立場を重視したのは方言学だけではない。社会方言学的方法論を開拓したラボフのニューヨーク調査(一九六〇年代)でも生え抜きが調査対象となった。調査地の人口の多くが、非生え抜きどころか、英語の非母語話者であるこの町でこうした調査が行われたのは意外である。

非母語話者を研究対象にする分野というと、まず思い浮かぶのは中間言語研究だと思われる。「中間言語」とは、外国語学習の間違いを分析し、その間違いの中の規則性を見出そうとする分野である。誤用が恣意的なものではなく、規則性のあるものと分かれば、より効率のいい学習環境を作り上げることでもできるため、有意義な研究である。

しかし、「非母語話者」がすべて「外国人」というわけではない。自分の国の標準語を覚える方言話者も、一種の「非母語話者」とみなすことができよう。要するに、東京以外のところで言語形成期を過ごした人の東京語習得を研

究対象にすることも役立つ。これは現代だけではなく、歴史的にも面白い観点である。

二 日本語の歴史に見られる非母語話者の影響

縄文人が暮らしていた日本列島に入ってきた弥生人が同一の言語を話していたとは極めて考えにくい。さて、どちらのことが日本祖語だったのであろうか。図1と図2のように二つの可能性が考えられる。

図1で、昔の日本語を話していたのは縄文人であり、別の言語（仮に「弥生語」と呼ぶ）を話していた弥生人が入ってきた。図2は、逆に弥生人がアジア大陸で話していたことは状況を表している。また、第三の可能性もある。それは、縄文人と弥生人の両方が話していたことばがその後の日本語とはかなり違う言語であったが、それらの二つの言語が混ざった結果、

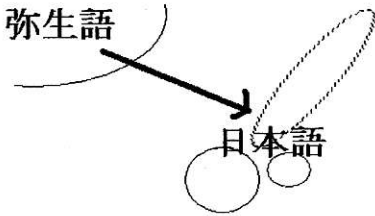


図1 弥生人が外国語として習った縄文語が古代日本語になったという仮説

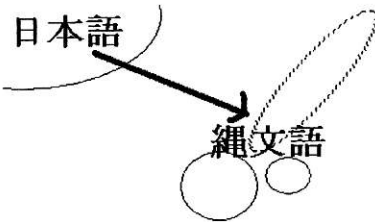


図2 縄文人が外国語として習った弥生語が古代日本語になったという仮説

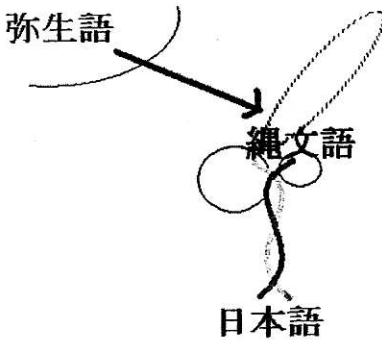


図3 弥生語と縄文語が混ざった結果古代日本語ができたという仮説

それまでになかった日本語が生まれたという可能性である(図3)。

いずれにしても、日本語が形成された過程で非母語話者たちが大きな役割を果たしたことになる。しかし、ここで仮定している現象が起きたとしても、何世紀も前の話で当然記録が残っていないので、どうやってこの仮説を追究すれば良いだろうか。最も有効な方法は、近現代の非母語話者に見られる様々な傾向をつかみ、その名残と考えられる特徴が現在の日本語に現れているかどうかを調べることである。これについては本稿の後半で取り上げるが、その前にもう少し歴史的研究における「非母語話者」研究の応用の可能性について探っていきたい。

日本各地の方言が形成された歴史にも非母語話者が果たした役割があつたかもしれない。まず、従来の方言形成の考え方を図4に表した。

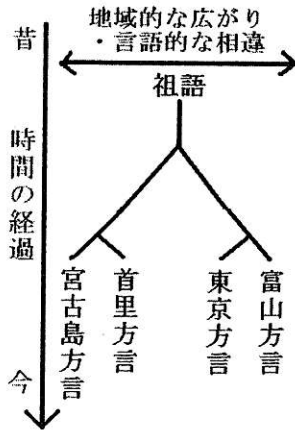


図4 日本祖語の枝分かれによって形成された諸方言

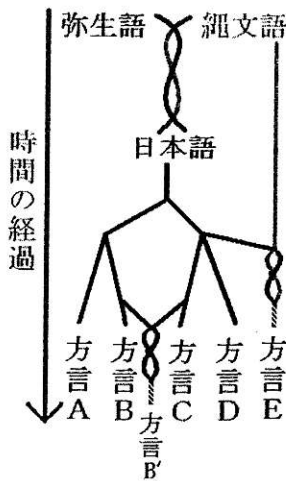


図5 枝分かれと接触によって形成された諸方言

この考え方は、昔、日本語という言語が話されていた(ここで「昔」と言っても、図1や図2、図3で日本語が形成された後の時代である)。時間が経つにつれ、列島各地に散らばって住んでいる人々の日本語が変化する。離ればなれになっているので、同一の方向に変化する必然性がなくて、年月が経つにつれ、違った方言へと進化する。やがて、

宮古島方言や首里方言、東京方言、富山方言、秋田方言など形成された。

しかし、方言のバラエティのすべてがこの枝分かれモデルで説明できるわけではない。別の言語との接触によって形成された方言もある。現在のハワイ英語は、ハワイ先住民や日本、韓国、中国などアジア各国からの移民が第二言語として覚えた英語の特徴が結晶したのが起源である。アイルランド方言の英語もケルト語を母語とするアイルランド人がイングランドに征服されたときに第二言語として習得した英語の影響が色濃く残っている。

三 現代諸方言の形成過程に見られる「非母語話者」の影響

このように非母語話者の存在が方言形成の背景にあるというのはけつして珍しい現象ではない。別の言語と日本語が混ざった結果できた方言もあると考えられる。金田一京助は一九三四年の論文で、現代の東北方言は、その昔アイヌ語を母語とする人たちが日本語を習得した結果生まれたのかどうかを検討している。(結論は否定的だが、こうした問題を検証していることじたいが興味深い)。また、日本海側地域に共通して見られるいくつかの言語的特徴(例えば「アヌノカゼ」という語彙の使用など)があることから、昔、その一帯でヤマト文化とは別の言語が使われていたのではないかと考える研究者もいる。富山県出身の真田信治が次のように述べている。

方言研究者、室山敏昭さんは、このアヌノカゼという風名は、大和や奈良の中央の言語文化とはまったく関係のない、さらに古い時代にさかのぼる、この列島における基層言語、それも出雲地方を中心に定住したと推定される海人の流れを引く言語文化を特徴付ける重要な指標の一つで、多元的な原始日本語のきわめて貴重な痕跡を示す象徴と推定しています。

(真田二〇〇二：二五頁)

また、山形県出身の井上史雄が、東北方言に孤例(つまり、語彙的なバリエーション)が少ないことを指摘し、次

のように述べている。

日本語の話し手が東北地方に住んだのは、九州に住んだのよりずっと遅れたのではないかという考え方があ
る。 日本語の話し手が九州に上陸して以来、アイヌ語の話し手が東に、北に追い上げられる過程が、二千年以上
わたって続いたと考えられる。九州にくらべて東北では年月が経っていない分、方言の分岐が少ないと説明でき
る。

(井上一九九二:六一頁)

一般的に言えば、方言的バリエーションが少ない地域は、その言語が話されている時代が浅い。英語の歴史が千数
百年もあるイギリスに比べて、数百年しかない北米の方は方言的バリエーションが少ない。広い北海道でも方言的差
異がほとんどない原因も、そこで日本語が話されている歴史が浅いことにある。

中井精一(二〇〇四b:六九頁)によると、「この地域方言の分布特徴をもとにした「富山独自」の要素あるいは
「東日本」的な要素とはいったいどのような背景をもっているのでしょうか。……いまだ明確な解答を導くことがで
きないでいる。ただ、これらの要素は、「中央文化」波及以前からの日本の基層文化につながる古い文化要素の可能
性もある」。

音声面における例もある。日本海地域の音声が古いという考え方があ。中井精一(二〇〇四a:二二八頁)が次の
ように述べている。

このような日本語音韻の特殊な地域性については、縄文時代以来の古い言語音をそのまま、あるいはかなり近
いかたちで残しているという考え方と、弥生時代以降に近畿から地方に向けて「日本文化」とともに送り込まれ
た「中央日本語」が入ることによって生じた、言語接触に伴う新しい変化と見る二つの考え方があ。ただ、ど
ちらの考えにたつにしても、こういった音声的特色を見せる地域は、近畿を中心とした「中央日本語」とは異な

る言語を保持していたことはあきらかである。

さらに、中井(二〇〇三)は次のように述べている。

「スイスイ舞を見る」というような出雲や東北につながっていくような言い方は、記紀などによっても出雲と越中・能登が密接な関係をもつことから共通性は理解されるのですが、弥生時代が始まる以前にこれらの地域が共通した文化要素をもつていて、その共通した発音の残存が中舌母音だと思っています。つまり縄文時代に培われた地域間交流や日本海地域の特性によって形成された縄文日本語の残存がこれだと思っています。

アクセントについて、真田信治(二〇〇二:三三頁)は次のように述べている。

アクセントにしろ、このようなズーズー弁的音韻規則にしろ、その存在、非存在について言語外的な環境からの説明がつかないという点で、これは中央日本語が伝播する以前のわが列島周縁部での基層の音的フィルターではないかと考えるのです。その分布領域が北関東から東北、北陸、そして出雲へと連続していることも注目されます。

以上のことを総合すると、現在の日本海地域諸方言を見れば、昔そこにいた人々が日本語を第二言語として覚えたのではないかと思わされる。外国人が自然習得によって外国語を覚えると、その複雑な文法規則がうまく把握し切れず、それを単純化した形で使用するという現象がしばしば見られる。日高水穂(二〇〇四)の研究でこうした文法体系の単純化が見つかっているが、それは秋田県本荘方言である。以下の表1を見よう。

一見すると、標準語よりも複雑に見える。標準語は語幹として「し」と「す」の二つしか持たないのに比べて、本荘方言では「さ、し、す、せ、そ」の全てが語幹として用いられる。しかし、よく見るとこの方言では「する」という動詞が五段化している。「話す」や「越す」の活用は語幹の「はな〜」や「こ〜」に、表1と同じ語尾が付くわけ

表1 秋田県本荘方言と東京語における「する」の活用パラダイム(日高水徳二〇〇四)

	否定	過去	終止	連体	仮定	命令	意志
本荘方言	サネー	シタ	ス	ス	セバ	セ	ソー
東京語	しない	した	する	する	すれば	しろ	しよう

である。すなわち、サ変動詞を五段動詞と同様な活用をすることにより、文法的カテゴリーを一つ減らし、文法体系全体の単純化が果たされた。論文で日高は控えめなコメントをしているが、口頭発表で、この文法的単純化の原因として、大和政権のことは(日本語)とは別の文法体系を持つ人々が日本語を第二言語として習得したことも考えられると指摘している(日高二〇〇三)。

以上、色々な時代や場所で言語習得が起きた可能性があることを指摘したが、これらをより科学的に検討するにはどうすれば良いだろうか。ここで「起きた可能性がある」と指摘している言語習得はいずれも数百年前に起きているので、調べ得ることには限界がある。しかし、現在起きつつある言語習得現象を細かく分析すれば、過去に起きた現象の分析にも役立つ。アメリカの社会言語学者ウィリアム・ラボフが言う「Using the Present to Understand the Past」である。以下で、現在の非母語話者に見られる傾向を考えたいと思う。

四 現在各地の「非母語話者」の間で起こりつつあるネオ方言化

日本語を母語としない人が話す日本語のことを「中間言語」と言う。一方、似たように、東京語を母語としない人が東京語(標準語)を習得するときはその地方語の特徴が残るといふ現象がたびたび見られる。これは真田信治が言う「ネオ方言」である。これからの「非母語話者」の研究で、中間言語とネオ方言との共通点や相違点を探ることが

報新奥陸

津軽に根ざした情報をお伝えします！

岩木山

2003.04/23 社会・時事・経済

東京文社ページ

東京文社ページ

東京文社ページ

時事トピコム

12/14 社説

12/14 冬夏言

過去の社説・コラム

社説

放置自転車をなくしよう

駅周辺や中心市街地に放置される自転車は全国的に減少傾向にあるというものの、根絶するのは容易なことではないようだ。

放置自転車は街の美観を損ねるし、歩道をふさいで歩行者の迷惑にったり、車道に置かれて救急車など緊急車両の通行を妨げたりする事態も各地で起きており、大きな社会問題となって久しい。

図6 津軽など使われる「なくしよう」という表現の実例

重要になってくる。外国人の日本語習得による中間言語現象の具体例をのちに見るが、その前に、様々な地方語（方言）を母語とする人が標準語を習得することによって生じる「ネオ方言」の具体例を見ることにしよう。

まず、九州北部で使用される「アッテル」という語形を挙げる事ができる。

「今運動会があつている」のように使われる。この地域の伝統方言の文法では「アリヨル」という、存在動詞「アル」に継続態（進行態）のアスペクト表現「ヨル」が付くことがあり得る。もちろん、標準語では、「ある」はアスペクト表現は付かないが、この地域で「遊びよる」や「食べよる」という伝統方言形式が標準語の「遊んでる」や「食べてる」に変えられるという変換規則をこの地域の話者が持っている。そしてその変換規則の過剰般化によって、標準語と伝統方言の両方に見られない形式「アリヨル」が誕生している（陣内正敏一九九六）。これはすなわち、東京語を母語としない話者たちの言語習得によって生じた現象である。

熊本で、「楽イ」や「変ナイ」のような形式がみられる。東京語では「楽な・変な」は形容動詞で、「うまい」などの形容詞とは違う活用が行われるが、この地域では「ヘンナカ・ウマカ」のように同一の文法カテゴリーである。方言の「カ」を「い」に変えると東京語になるという意識からこうしたネオ方言語形が生まれた（吉岡泰夫一九九〇）。鹿児島で、「ヤスクデ譲つてもらった」という使い方が見られる（木部暢子一九九五）が、これも地元の話者が東京語を第二方言として習得した際

に生じた一種の中間言語形式と言える。「先輩から文句シヤベラレマシタ」や「ナクシヨウ」という津軽のネオ方言も挙げる事ができる(佐藤和之一九九六)。東北や北海道で広く使われているナクシヨウは「無くする」の勧誘形で、標準語の「無くそう」に当たり、「財布を無くす」のような無意志表現と対立している「意識的に無くす」場合に使われる。後者は以下の図6で分かるように、標準語と意識されており、新聞の社説のような非常にフォーマルな書き言葉にも現れる。

のちに、琉球語諸方言(沖縄本島や奄美)の話者が東京語を第二方言(第二言語)として習得する際に起きるネオ方言(中間言語)現象を見るが、その前に外国人が日本語を習得するときに見られるいくつかの特徴を見てみたい。

五 外国人が使用する非母語話者の日本語

ここで外国人が習得した日本語に見られる母語の影響(母語の干渉)について考えたい。

まず、外国人学習者のことばの特徴を、母語が直接影響を与えている場合(転移)と、そうでない場合に大別することができる。後者の例を先にみよう。中国語、英語、フランス語など、様々な母語を持つ学習者に見られるのは、「美しいノ絵」とか「勉強しているノとき」のように、修飾語(修飾句)と被修飾語を「の」で結ぶ現象である。上記の三つの言語では、それぞれこうした構文は異なり、修飾語と被修飾語との間に小さな単語(「の」のような機能的形態素)が挟まれるかどうかも言語によっても異なる。つまり、これは母語の直接の影響とは考えられない。むしろ、「子供の頃」「昼の番組」のような構文への類推によって、日本語の文法規則を外国人が誤って拡大解釈をしてしまった「過剰一般化」が原因だと考えた方が良さそうである。

非母語話者(ノンネイティブ)の日本語には、「ムズカシイデシタ」(難しかったです)のような誤用もよく見られる。

これも母語の直接の転移ではなく、自分にとって第二言語である日本語のルールを誤解している過剰一般化による。つまり、「学生です、学生でしょう、学生でした」や「静かです、静かでしょう、静かでした」が文法的に合っていることから類推して、「難しいです、難しいでしょう、難しいでした」という文法的パラダイムを作ってしまう。これも過剰一般化に当たる。

では、前者の方、母語が直接影響を与えている場合の「転移」の例を見よう。ロシア語母語話者による日本語の「〜のとき」を意味する表現形式に関する大関浩美(二〇〇三)の興味深い論文がある。このロシア語母語話者の日本語は、教室で習ったものではなく、いわば自然習得によるものだった。彼女の日本語には、「いつ食べる、しゃべってるだめ」(つまり、「食べているときにしゃべったらだめ」の意味)や「魚、いつ近い、泳ぐの怖い」(魚が近いときに泳ぐのが怖い)、または「私たちがいつ子供……」(私が子供のとき……)のような非常に特徴ある言い方が見られる。実は彼女の母語では、日本語の「〜(の)とき」に当たる言い方と、疑問詞の「いつく？」に当たる言い方は同一の単語が使われる。(英語の“I was sick when I was a child”と“When are you coming here?”のような二通りの用法を思い出すと分かると思う)。語順の面においても母語の干渉が見られており、日本語のように「文+トキ」ではなく、ロシア語(や英語など)のように「イツ+文」の語順になっている。

一方、韓国人の日本語学習者が同じ間違いを犯すとは考えにくい。韓国語はこの点についてむしろ日本語と同じ。つまり、韓国語において「いつく」と「〜(の)とき」には別々の表現が使われるし、日本語のように、前者(疑問詞)が文の前に来て、後者が文のうしろに来る。韓国人は(この文法事項において)上で見た「負の転移」とは違って、「正の転移」を見せており、母語が日本語に似ている点で得るのである。つまり、「外国人だからと言って日本語を習得する際に母語がじゃまになる」のではなく、日本語により近い言語なら母語の影響が比較的小さいと言える。

六 ネーティブとノンネーティブとの境界線はあるのか？

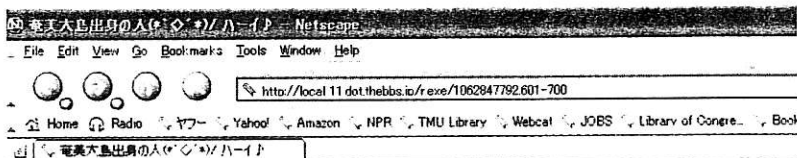
筆者は数年前から小笠原の欧米系島民の言語実態をフィールドワークによって調査し、分析を行ってきた。彼らが使っている言語変種には独特な言語形式や用法が見られる。例えば、「カリフォルニアで何年もミテいない友達をミタ」や「さびしいから、前のクラスメイトをミタクなった」、「またミルよ」のように、「会う」を「ミル」と表現する言い方が聞かれる。英語では、これらの場合に *meet* ではなく、*see* が使われる。「葉をトル」や「シャワーをトル」も英語の *see* の直訳である。また、電話のときに相手の家に行くことを「今から来るよ」や「葉っぱを刻んで鳥にクレタ」「やる」（あげる）の意味で「クレル」を使うのも、同様な用法が見られる英語の影響だと思われる。しかし、この「クル」や「クレル」の用法は日本各地の方言にも見られるので、原因を一つだけだと断定することは難しい。

先の秋田県本荘方言の例のように、パラダイムの単純化（二種の文法ルールの合理化）は小笠原の欧米系にも見られる（表2）。標準語で、「来る」の活用形には、語幹として「ク、コ、キ」の三種類が出てくるが、欧米系島民のことばでは、これが「ク、キ」の二種類だけとなり、全体のパラダイムが単純化される。

表2 小笠原ことばにおける「来る」の活用パラダイム

標準語	クル	コ(ラ)レル	コヨウ	キタ
小笠原ことば	クル	クレル	キヨウ	キタ

ところで、ノンネーティブの間で作り出された新しい言語形式は全て単純化によるものではない。日本語よりも複雑になっている場合もある。例えば、小笠原諸島の欧米系島民には、ウマイとウンマイを意味の異なった語として認識している話者がいる。前者は「上手」で、後者は「おいしい」として使い分けられている。同様に、各地で日本語



[683] ひろまつ 03/11/28 10:12

急に、年代の近い人が集まってきたや。ちなみに俺は今、立川住んでますわ。俺たちの俺たちの大学の学祭には、「蓮池透」さんが講演をやりに来ました。演題は「[?]き裂かれた24年」というものでした。。。重い。。。重すぎる。。。せっかくの楽しい場になんでそんな話をするのか、[\[?\]?](#)昨日、友人から大高53期生の掲示板を教えてもらって覗いてみたら、懐かしい名前の人一杯いました。

図7 奄美のトン普通語で使われる「意味がウツル」の用例その1

ネーティブの話者が話している標準語(いわゆる地方共通語)にも、こうした複雑化が見られる。先に見た、東北の「無くす・無くそう」(非意図的)と「無くする・無くしよう」(意図的)という使い分けも複雑化である。これらの例を並べて考えていると、第二言語として日本語を習得した人の言語的特徴と第二方言として、東京語を習得した人のそれとの間に共通点があることに気づく。

「第二言語としての日本語習得」と「第二方言としての標準語習得」との境界線が完全に分からなくなるのが、琉球諸方言を基盤とした、現在これらの地域で使われている地方共通語である。ここで、沖縄のウチナーヤマトウグチと奄美のトン普通語の例を見よう。奄美には「意味がウツル」(通じる)という表現が方言としてではなく、標準語として使われる。用例をインターネットで検索すると、以下の図7や図8のように複数出てきたが、いずれも奄美出身者の書き込みであった。

「ウツル」は個別語の例だが、伝統的な言語体系(方言)の干渉によって生じた文法事項もある。「ヨッタ」がこれに当たる。筆者がメモ用紙を探していたときに、言われたのは「さっきポケットに入れヨッタけど」である。これは単なる過去形と違って、話者が実際に見たり聞いたりした「報告相」という文法形式である。「ヨル」という形式そのものは九州方言から入ったが、そこでアスペクト表現(継続態)として使われていたものがこの報告相に変化したのである。

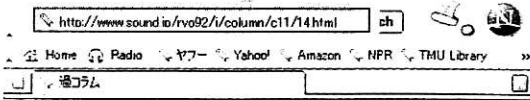
沖縄にも、琉球語の文法構造が地元で使われる標準語に影響を与えた例が数多く現

さて、先に見たネオ方言というのも、話者が標準日本語を習得した際に自分の母語（母方言）がじゃまになったという現象であった。ネオ方言の研究はさほど古くないが、真田信治が一九八七年にこの現象を指摘してから、かなり

七 ノンネーティブの言語実態を総合的に捉えた社会言語学の新しい研究分野に向けて

で「今夜は楽シイデシタ」と挨拶していた。

元人はこれを *Yengekiwai* と発音していた）を鑑賞していた時に、村長が数百人の前で見つけることができる。先に取り上げた形容詞の過去形も沖縄や奄美の若者の間ではごく普通に使われている。筆者が南大東島で村主催の演芸会（ちなみに、地



猪木が指を三本たてて「わんくあー！」と叫ぶのだが、僕にはどうもその意味がわからなくて、~~「意味がわからなくて」~~「わんくあー？」と指三本たててやってみるのに、猪木の方は納得がいかないらしく「ちがーう！」と言ってまた「わんくあー！」と繰り返す。でもってこっちも一生懸命マネしてんのに、やっぱり猪木は納得してくれない。結局僕は、「わんくあー！」と叫び続ける猪木に肩をガッチリつかまれて大きく揺さぶられながら、次第に意識が遠のいていった。そして気を失った瞬間に目が覚めた。夢だった。夢だったのに、猪木にやられてたように体は揺れていた。地震だった。震度5に揺さぶられながら僕はボツリ「わんくあー…」とつぶやいた。

図8 奄美のトン普通語で使われる「意味がウツル」の用例その2

れている。例えば、「君の電話番号ナラワシテ」を挙げることができる。これは「習う」の使役形（つまり「教える」の意味）で、伝統方言の使役形 *narasajun* の直訳形である。「味シテミル」という言い方もある。標準語の「味見する」と同じ意味だが、要するに、「味（が）する」という自動詞に加えて、「味する」という他動詞も生まれているのである。気になるのは、小笠原の欧米系島民のことばにもまったく同じ表現があること。小笠原に沖縄出身者が住み着いているのは事実だが（しかも結婚で欧米系コミュニティに入る沖縄人もいる）、その人の直接の関与よりも、両地域の人が標準日本語を第二言語（方言）として習得したという共通点に起因しているのではないかと思われる。

沖縄では、外国人の日本語（中間言語）と共通している言語形式をこの他にも

多くのデータ収集と分析が行われており、第二言語としての日本語学習の研究にも役立ちそうである。逆に、「中間言語」や「母語の干渉」といった枠組みの中で研究された世界の言語に見られた実証的データがあるし、この分野の理論もかなり進んでいるので、「ネオ方言」など、各地で標準語と伝統方言との接触によって起きている現象の分析・実態解明にも役立ちそうである。問題は、これまで、〈外国人が使っている言語変種は「中間言語」で、日本各地で使われているのは「ネオ方言」である〉、そして、前者は日本語教育の研究分野で、後者は社会方言学の分野であるという認識だった(図9)。

ここで提案したいのは、むしろ図10のように、これらの言語変種を連続体として捉えるという考え方である。

より厳密に考えると、韓国語やモンゴル語のように日本語により近い言語、あるいは英語や中国語のようにより遠い言語の、それぞれの場合に順番が付けられるわけではない。図10のように一本の線上にそれぞれの母語(母方言)が位置づけられるモデルよりも、図11のように放射状で表した方が実態に合っているかもしれない。

近年、言語接触という人間と人間が面と向かって話す際に起こる現象に注目した社会言語学の研究が徐々に増えてきている。外国語の自然習得や国内の移動によって生じた言語変種の実態解明は現代を把握するのにも当然役立つが、古代に起きた言語接触を分析する際にも応用することが可能だろう。言語変異のより多面的な研究の実現のためにも以上で概説したようなノンネイティブ話者に注目した新しい社会言語学の枠組みが期待されているのである。

これからの非母語話者に視点を置いた新しい社会言語学研究に必要なのは、日本各地(特に中央語から離れた言語変種)を対象にしたフィールドワークと日本語学習者の日本語の徹底的な実態調査である。日本人の方言話者が東京語を学んだ結果出てきた特徴のある「標準語」、外国人が日本語を学んだ結果出てきたもの、この二種類を比べてみる必要がある。そして、起こりやすい現象と起こりにくい現象を見る必要がある。(例えば、上で共通して見られた



図9 第二言語学習者に見られる言語変種と日本各地で使われている言語変種を二分化する考え方

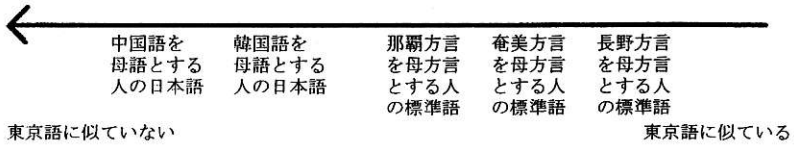


図10 第二言語学習者に見られる言語変種と日本各地で使われている言語変種を連続体で見る考え方

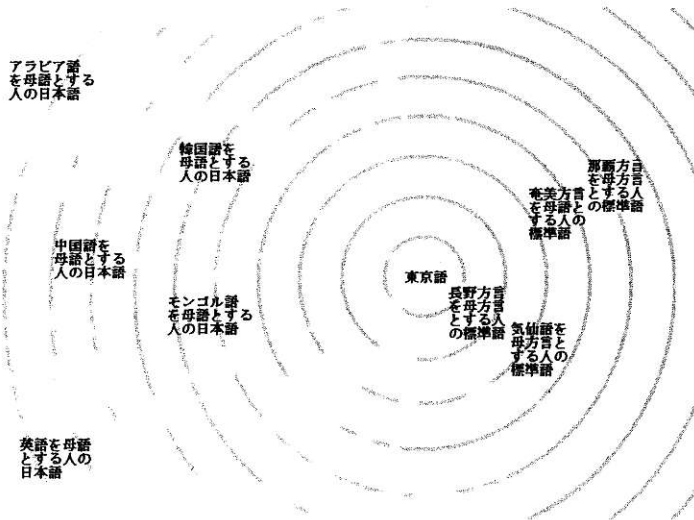


図11 東京語を第二言語（方言）として習得した人の言語変種を連続的に捉える放射状モデル

「楽シイデシタ」という文法形式が生じやすいようである。こうした言語形式を量的にも、質的にも考慮した上で、理論化する必要がある。より出現しやすい形式とそうでないものが分かれれば、日本語の変わりやすい部分と変わりにくい部分が見えてくるだろう。要するに日本語自体の「芯」と「周辺」の部分が見えてくるのではないかと思われる。

参考文献

- 井上史雄（一九九二）「方言の多様性と日本文化の流れ―孤例の分布とアイヌ語基層―」『日本語学』一一―三、五七―六七頁
 『東北方言の変遷』に再録
- 大関浩美（二〇〇三）「中間言語における variation とプロトタイプ・スキーマ」『第二言語としての日本語の習得研究』六、七〇―八九頁
- 木部暢子（一九九五）「方言から『からいも普通語へ』」『言語』二八九、一六六―一七七頁
- 金田一京助（一九三四）「ズーズー弁とアイヌ語発音―東北方言は果たしてアイヌ語なまrikaか―」『国語研究』三一八（金田一京助全集 三）（三省堂一九九二）などに収録
- 佐藤和之（一九九六）『方言主流社会』おうふう
- 真田信治（一九八七）「ことばの変化のダイナミズム―関西圏における neo-dialect―」『言語生活』四二九、二六一―三二頁
- 真田信治（二〇〇二）『方言の日本地図ことばの旅』講談社
- 陣内正敬（一九九六）『地域語の生態シリーズ九州篇 地方中核都市方言の行方』おうふう
- 長友和彦（一九九三）「日本語の中間言語研究―概観―」『日本語教育』八一、一一―一八頁
- 中井精一（二〇〇三）「言語からみる日本海地域」 <http://www.nihonkaigaku.org/1030516/t2.html>
- 中井精一（二〇〇四 a）「共鳴するユーラシア大陸東西の島嶼言語文化」『日本海／東アジアの地中海』桂書房、二二六―三三六頁
- 中井精一（二〇〇四 b）「語彙分布からみた富山県方言の地域差とその背景」『日本海沿岸の地域性とことば』桂書房、五一―七一頁
- 日高水穂（二〇〇三）「日本海沿岸地域の文法の諸相」十一月三十日に富山市で行われた講演

日高水穂 (二〇〇四) 「北日本の日本海沿岸地域に見られる文法体系の単純化現象」『日本海沿岸の地域性とことば』桂書房、二四
三—二五八頁

室山敏昭 (二〇〇二) 『アユノカゼの文化史—出雲王権と海人文化—』

吉岡泰夫 (一九九〇) 「高校生のことばの特徴—獲得と消失」『日本語学』九—四、五三—六五頁

ロング、ダニエル (二〇〇三) 「敬遠される日本語の一人称」『月刊日本語』十二月号、六〇—六一頁

ロング、ダニエル (二〇〇四) 「方言変化研究から得られるヒント」『月刊日本語』一月号、五八—五九頁

ロング、ダニエル・橋本直幸 (二〇〇五) 『小笠原ことばしゃべる辞典』南方新社

Selinker, Larry (1972) *Interlanguage. International Review of Applied Linguistics* 10